

## 報告書 要約

本書は佐渡市世界遺産推進課が行った「佐渡市寺院建造物悉皆調査」の報告書である。調査は佐渡島内に残る寺院建造物の悉皆調査を行い、寺院建造物の評価基準の策定及び建築史的価値の高い建造物の抽出を目的とした。

佐渡市には原始・古代の遺跡をはじめ、金銀山に関連する遺跡や寺社建造物、民俗芸能など、多種多様な文化財が島内全域にわたって存在する。佐渡島内の文化財数は平成24年3月時点で415件を数え、新潟県内の文化財数において特に高い割合を占めている。平成18年に新潟県と佐渡市が共同で文化庁へ提出した世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書「金と銀の島、佐渡一鉱山とその文化―」では、金銀山に縁のある寺社建造物は構成資産候補の一つとして位置付けたが、その所在をはじめ、各々の建築年代、保存状況、建築史的価値を明確にするまでには至っていなかった。そのため、平成19年度から23年度にかけて、寺院建造物の悉皆調査を実施し、2,165棟のリストを作成すると共に、これらの中から歴史的価値が高いと評価できる本堂、堂を対象とした125棟について調査を行い個別評価と宗旨による特徴などを整理した。

調査の結果、1600年代から1700年代前期に至る寺院建造物は40棟確認され、これ以降の物件は1700年代中期から近代に至る各年代にまんべんなく存在していることが明らかとなった。建築年代が古いため、屋根をはじめとする各所に改造の跡が見受けられたが、構造体にはほぼ手が加えられておらず、残された痕跡から復原も可能な状態である。

本堂の形式としては、仏の座以外を和風書院としてまとめた方丈（講堂）型本堂が多く確認された。また、同じ境内に建つ3間堂、5間堂の中には、かつて「本堂」と呼ばれていたものもあるが、これらの堂と別に、広い参拝空間を持つ講堂（本堂）を建て、寺院活動の中心施設となっていることも聞取りにより明らかとなった。これらの堂は、方丈（講堂）型本堂とは異なる空間を演出し、豪華でかつ力強い。

内陣に設けられた祭壇は、独立した「出須弥壇」と内陣の背面壁に接して配する「三連横並びの祭壇」に分類される。後者は比較的建築年代の古い寺院で確認されたため、古い形式と考えられる。また、現在は出須弥壇であるが、以前は三連横並びの祭壇であったと考えられる本堂も多数確認された。

本堂内に施された渦巻彫刻には一般的な円形渦巻の他に瓜型のものや、上下両方から渦を巻込むものもあり、越後に比べ佐渡の方が若干新しく見える。後者の渦巻は新潟県内ではあまり見受けられない形で、特筆に値する。この背景には他地域との情報伝達的手段として海路を利用していたことが挙げられる。

堂については、「本堂」と呼ばれていた3間堂、5間堂の他に、正面の柱間数が一つの1間堂と、仏を祀る宗教空間と囲炉裏の間と称する生活空間を設けた横長の平面を持つ多室構成堂が確認された。多室構成堂は佐渡以外ではあまり確認されておらず、佐渡特有の形式といえ、そのほとんどは近隣住民によって維持管理されてきた。これらの堂も本堂と同様に改造の手が加えられているが、残された痕跡から復原が可能な状態である。1間堂は小堂ながらも、佐渡島内最古の部類に入る建築であり、貴重な事例といえる。

これらの調査結果は、桃山時代から近代に至るまでの佐渡島内における寺院建築の歴史を編みあげることが可能であることを示している。おおまかにではあるが、1600年代の建造物は重厚で閉鎖性の高い空間を持ち、1800年代の建造物は軽快で開放的な空間を持つ。この形は現代まで続いている。このことは中世からの脱却と、近代への移行と見ることができる。また、1700年代は経済力の向上と技術革新の年代であると考えられる。寺院建造物は長い年月を経て、現在まで伝えられたものであり、佐渡の歴史の一端を記す貴重な文化財である。